守護犬とご主人様

璃湟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守護犬とご主人様

【Ｎコード】
Ｎ２００４Ｓ

【作者名】
璃湟

【あらすじ】
ひっそりと地味に暮らしたい！と願うお茶くみＯＬ（２８歳独身）と、一癖も二癖もありそうな外面だけは完璧紳士の男。二人のおかしな主従？生活が幕を開ける！！　「逃がさないよ？」「私の生活を脅かすんじゃねぇえ！！サディスト！！」

気まぐれ更新

1

私、篠山（シノヤマ）　智美（チエミ）はなんと守護犬になってしまいました。

……最っ悪だ、こんちくしょぉおぉおお！！！！！

ーーーーーーー

「篠山くん、これコピーね」

「篠山くん、お茶」

「篠山さん、これを経理に持って行ってくれない？」

おいおいおい、
君達、私の腕が一体何本あると思ってるんだい？
私の目には二本しかないように見えるけど、君達はまさか私の手が
千手観音様のように見えてるんじゃないだろうね？

……なんて、
反論を言えるわけもないのがお茶くみＯＬの悲しさだ。

「はい、分かりました」

言える言葉はただこれだけ。

次々と言い渡される雑用や、デスクの上に積み上げられる仕事にうんざりするのはもう飽きた。

やってやろうじゃないか。
ＯＬという花道に、私の血と汗と涙という熱い情熱を注ぎ込んでくれようぞ！！！

カタカタと両手をまるで電動機械のように動かして、テキパキとパソコンのキーを叩く。
当初は全くこれっぽっちも使い方が分からなかったパソコンも入社五年目ともなれば慣れたものだ。

篠山　智美。
お茶くみＯＬの２８歳。

そろそろ満開の花も萎れ時を迎えるように、”若い　”という言葉がきつくなってきた年頃だ。
もちろん独身で彼氏なし。

まさに独身ＯＬ代表といってもいいくらいなのがこのわたくし、篠山　智美なのだ。

さて、２８歳独身というのはそろそろ男からは女という価値すら見失われてしまう。代わりに女たちからは”おばさん”と称されて時折、笑いのネタにされてしまう。
いつまでも独身とか、仕事にばっかかまけて女捨ててるとか、男に見向きもされない可哀相な女だとか。

一つ言わせて欲しい。

余計なお世話じゃ！！！

だいたい、若い女たちは、きゃっきゃっ言いながら男たちに取り入りつつ仕事をテキトーギリギリの部分までしかしない。
学生気分が抜けないのか、仕事中にはトイレという休み時間をふんだんに使い、やることと言えばこれでもかと塗りたくったプチ整形の化粧直しと、愚痴トークのオンパレード。

お前らがいると、気軽にトイレできねぇんだよ！！
邪魔くせぇんだわ！！！
男にかまけてる時間があるなら、書類整理の一つでもやってみろやぁあああぁあ！！！？

……とはまぁ、心の内で爆発させておく。

さらに同年代といえば、だいたいが競うように結婚退職をし始めてしまっている。
つい先日も二人ほど結婚退職をして辞めていった。

そしてまた新しい若い女の子がその穴を埋めるようにやってくる。

こうして次第に”おばさん”と化していくのだ…私みたいなやつは。
それに危機感を覚えて、今や若い女の子たちに混じって合コンやらに力を入れる同年代たち。

だが、気づけ。
君達が必死になればなるほど男たちはその熱意（いや殺気か？）に怯えるのだ。
さらに言えば、おばさんに成り行く私たちは若い女の子たちの”若さ”を引き立てる駒にもなりえることを！！

現に、それを狙ってわざわざ私たちを誘う若い女の子がいるのだ。
……う～む、女の子はどんどん策士家としての能力が上がっていくなぁ。

さて、私はと言えば合コンに誘われることは滅多にない。
なぜか？
いやいや、美人だからとか誘いにくいからとかではない。

地味すぎるのだ。

ただ地味なだけなら、お呼ばれはたくさんする。…なぜなら、地味子の横にいれば少しだけ華やかで明るくさえしていれば自然と華やかさが際立つからだ。
だから、私も初めはたくさんの合コンに誘われた。

真っ黒で、ボサボサで適当にまとめただけの髪。
いつの時代の眼鏡だよ！と総ツッコミが入るほど古臭い縁眼鏡。
服はセールやユニ〇ロで買うのがほとんど。
明るい色のスーツやスカートなど、おしゃれを全くしない”田舎者”

しかし、それがいけない。
あまりに地味すぎると合コンという場を壊しかねない。

相手の男たちも、なぜこんな女を連れてきたんだ？と女たちを不満に思うだろう。
女たちからすれば、合コンという雰囲気を壊し、なおかつただの”比較対象”というのをありありと示したくはないのだ。さりげなく…それが彼女たちの求める地味さ。

だから、地味すぎる私は彼女たちにとって論外なのだ。

あからさまに地味だ地味だと馬鹿にされるが、私はこれで満足している。
いや、むしろ地味という響きは歓喜の言葉だった。

地味、なんて素晴らしい！！
私は道端の石ころや枯れ果てた雑草女になるのだ！！

女として見えない？
大いに結構！！！

女として見られず、そのままひっそりと暮らしていければ私の本望だ！！
それが私の理想！！
ビバ、マイ、ライフ！！！

……と、思って生きてきたんですがね。
それがあの悪魔に目を付けられたせいで…ガラガラと崩れ落ちてしまったのだ。

私の…私だけの素晴らしい生活が……。

あの悪魔…
高峯（タカミネ）　優夜（ユウヤ）によって

2

高峯　優夜。
それは我が会社の有能な若き上司の御年３３歳の超優良物件。
物腰柔らかな態度に、見る者に一目見ただけで好感を持たせる人好きする顔、低く耳に心地好いセクシー声、温厚、堅実、穏和…などなど。
ありとあらゆるプラス評価を我が物にするエリート。

さらに、親がどこだかの地主らしくてお金持ち。

これに食いつかない女がいるだろうか？
おそらく、９９％の女は食いつくだろう。
独身で有能な彼は、女からしたら鴨がネギと高級松坂牛を持って歩いているようなものだ。

だいたい、そういった男はあからさまに狙ってくる女たちに冷たく対応したりもするが、高峯　優夜は違う。
あくまで紳士的に全ての女性と接している。
だからこそ、女たちの熱意はさらに高まり、今や彼はこの近辺の女たちが断トツに熱を上げている男だといえる。

だが、彼に興味を抱かない女はたった１％だがいる。
言わずもがなだが、もちろん私のことだ。

何でかって？

タイプじゃない。
それだけ。

結婚する意思なんてないし、彼の親が地主だろうがどっかの石油王だろうが丸っきり関係がない。ていうか興味ない。

だいたい、わざわざ女の陰謀や策略がドロドロと渦巻く真っ只中に飛び込もうと考える勇者など、この平和な日本に存在するわけがない。
そんなことするくらいなら、テレビのアイドルに熱を上げるほうが私には賢いと思える。

それに……だ。

どうにもあの高峯　優夜は腹の内に何やら恐ろしいものを抱えてそうで怖い。
見たら最後、明日の朝日は拝めないだろう、と確信めいた気持ちが

頭を過ぎる。

うん、無理。
あいつには絶対近づかないどこう。

私は、それを念頭に毎日毎日ＯＬ生活を送っていた。
高峯　優夜と話したのは年に二回ほど。しかも全て仕事の話で、超短時間。
目すら合わせたことがない。

私はこの成果に自分で自分に満足していた。
していた……のに…っ！！

あぁ！！恨めしいのは、某日のとある出来事！！！

そう、あの日私は今だ新人だとほざく（もう６月だぞ！？）女が起こした仕事のミスを監督不行き届きという名目で、尻拭いをさせられていた。
いつもは定時に帰っていたはずが、仕事が終わったのは８時頃だった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「やっっっと、終わったぁあ…！」

ん～…っ！！と背伸びをして、から時計を確認する。
８時１０分。
まぁ、残業手当てを少しは期待してもいいだろう。

自称新人女に散々吐きまくった毒舌のおかげで、仕事は順調に片付き、気分も少しばかり晴れやかだった。

さぁて、帰るか！
と、踵を返した瞬間、私は足をピタリと止めた。

あれは……っ

「あれ？篠山さん？もう定時過ぎてるのにまだいたの？」

きょとん、とした顔で来たのはブラックリストＮｏ．１高峯　優夜

だった。

チッ、こんな奴と会ってしまうなんて……という思いは眼鏡の奥に隠しながら、頭を下げる。

「は、はいっ。お疲れ様でした…」

少しばかり緊張を含んだ声にして、さっさと立ち去ろうと歩みを進める。

だが、高峯　優夜の横を通り過ぎようとした途端、彼に腕を捕まれた。

「……ん??」

訳が分からなくて、自分の腕を捕まえているそれに何回か目を向ける。

なんだこれは??

さっさと離せ!!気色悪い!!

そんな心の声を知らないのか、高峯　優夜はその人好きする面に微笑みを浮かべながらニッコリと微笑んだ。

「もう夜は暗いから送っていくよ？」

それはまさにキラキラとした輝きに伴われながら吐かれるような夢のような言葉だろう……99％の女たちにとっては。

無理ぃぃぃぃぃ！！！
こんな人に送って貰うくらいなら、幽霊さんと二人で帰るぅぅぅぅぅ！！！

彼からしたら親切な気遣いから出た言葉だろうが、自分にとってはそれは正しくありがた迷惑と言ってもいいくらいの言葉だった。

だいたい、私みたいな女が夜道で襲われるわけないでしょうに。

「そんな…高峯さんのお気遣いは嬉しいですが…私は一人で大丈夫ですので……」
（訳　分かったらさっさと手を離しやがれ！！）

しかし、予想に反してますます力強く腕を捕まれてしまう。
内心では舌打ちしたくなるのを堪えながら、高峯　優夜を見上げる。

高峯　優夜は身長が１８８センチもあるらしく、かなりスタイルが良い。
１５８センチしかない私からすれば、見上げると首が痛くなるほどの差が生まれてしまう。

「でも、もう外は真っ暗だから女の子の一人歩きは危ないよ」

だぁあかぁあらぁあぁあ！！
私は大丈夫だっつの！！
つか、女の子とかキモいわ！！私はもう女の子なんて呼べる歳じゃねぇのを知らねぇのかよ、コンニャロー！！

「いえ…本当、高峯さんの手を煩わせることありませんし、私は大丈夫ですから……」

だから、早く離せ。

腕を引くと、今度はちゃんと離してくれた。
それにホッと息をついていると…

……チッ、

……ん？

今……え、あれ？？
いやいや……

何やら頭上で舌打ち……らしきものがありました……よ、ね？

誰が、という疑問が沸き上がりそうになるのを必死に抑える。

ないないないないない！！！
まさか、ねぇ？
そんな…まさかまさか、舌打ちなんて……ねぇ？？

沈黙が下りる中、
頭の中で点滅する危険信号に、私は考える間もなく本能的に従った。

逃げるが勝ち！！！

「では、あの…失礼します。お疲れ様でした！！」

最後はほとんど息もつかせぬよう叫びながら、彼に背を向けて走り出す。
その時、彼はブラックリストＮｏ．１という位置を私の中で不動のものとしたのだ。

それから、会社を出てから真っ直ぐ帰るのではなく行きつけのバーに行くことにした。
月に一度、そのバーでお酒を飲むのが楽しみの一つなのだ。
本当は、明後日行こうかと考えていたが先程から収まらないドキドキを抑えるには、今そこに行くしかない…そう思った。

ーーーーーーーーーーー

「ん〜…うまいっ」

ほのかな酸味と甘味のする特製カクテルを飲みながら、舌鼓を打つ。

はぁ……癒されるなぁ…

店内は割と静かで、耳に流れるクラシック音楽が心地良い。
このまま寝てもいいくらいだよなぁ…と思いつつ、カクテルをちびちびと飲んでいると、

カランカラン

店の扉が開閉される音が鳴る。

お、新しいお客さんかなぁ？と何の気なしに振り向いた瞬間…、

「……ひっ」

凍りついた。
マジで凍りついた。

「あれ？篠山さん、また会ったね？」

微笑むその顔に、薄ら寒い恐怖すら感じた。

ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ…

頭に浮かぶ問い掛けに思考が停止していると、なぜか彼…高峯　優夜はちゃっかりと私の隣のカウンターに腰かける。
今だ身体が凍りついたままだった私だが、隣に座る彼の気配にギギギ…と首をゆっくりと隣に向ける。

紛れもなく、
隣に優雅に座っているのは高峯　優夜だ。

ノォオオオオオオオ！！！！！
なんっっで、いるんだ貴様ぁあぁああ！！！

ストーカーか！？君は私のストーカーなのか！！？

「ストーカーではないよ？」

え……っ？？？

呆然とする私に、高峯　優夜は腹の底が全く見えない微笑みを浮かべながら、酒の入ったグラスを回す。

「ストーカーかって思ったんでしょ？」

「な、なんで…」

言ってから、はっ！！と口をつぐむ。
これでは、はいそうです。思ってました、と暴露してるようなものではないか！！

しかし、クククと楽しげに笑う声が聞こえて、思わず顔を上げる。
そこには屈託ない、心底面白いとでもいうように笑う高峯　優夜の姿があった。

あれ…なんか、印象が変わったような……

「本当、面白いよね。篠山さんって」

「そ、そうでしょうか…」

「あぁ、すごく興味深いね」

じっと見つめてくる高峯　優夜にドキドキと胸が高鳴る。
しかし、だ。

これは決してときめきによるものではない……例えるなら、そう。
獲物を狙う獣に目を付けられた…そんな恐怖を伴う緊張感からくるものだった。

怖い……
てか、やばい。

何だろ……早く、早く
彼から逃げ出したい…

その心の声が聞こえたのか、高峯　優夜は妙に優しい声音で話しかけてくる。

じっくりと獲物の様子を伺うように…

「篠山さんって、どうしてそんなに大きい眼鏡かけてるの？」

「え…？あ、あの視力が悪くて…」

「そう？それにしても、小顔な篠山さんにはちょっと大きすぎると思うけどなぁ」

私はこの眼鏡が気に入ってるんだから、とやかく貴様に言われる筋合いはねぇんじゃい！！！

と、いつもの私ならこれくらいの悪態の一つや二つはつける。

だがなぜか、今に限ってはそんな悪態すらつく余裕がなかった。

なおも高峯　優夜は柔らかい声音で話し続ける。

「篠山さんって、毎日仕事頑張ってるよね？」

「そ、そうでしょうか…」

「僕はそう思うよ。いつも見るたび、デスクに向かってたり、コピー取ったり、忙しそうだからね」

「は、はあ…」

いつも見てる…？
きもっ！そんな暇があるなら仕事しろや！！

「篠山さんは、仕事にはいつもいつも情熱的ですごいなぁ」

「そんな…私より、高峯さんのほうがすごいですよ」

てめぇにすごいとか言われたかねんだよ。
嫌味か、ごらぁあああ！！！

「僕はすごいわけじゃないよ。仕事がどんどん舞い込んでくるから仕方なくだし」

はっ、仕事が勝手に舞い込んでくるたぁ…良いご身分ですねぇ？

「それは、高峯さんがそれだけ仕事をできるって認められているからですよ。そして、それをこなせるんだからすごいです」

我ながら、よくもまぁ、こんな言葉をスラスラと吐き出せるもんだ。やはり、幾つになっても女というのはなかなか強かなんだな、と納得する。

ようやく混乱も落ち着いてきたが、一体彼が何を話したいのか全く検討もつかなかった。

眼鏡に、仕事に…
一体、何を言いたいんだろう…

「ありがとう、篠山さんにそう言われるとなんだか報われるみたいで嬉しいよ」

悩殺天使スマイルを繰り出されるが、背中から悪寒が走った。それ

をおくびにも出さないよう気をつけながら愛想笑いでごまかす。

高峯　優夜はいつの間にか五杯目くらいの酒を飲むと、にっこりとした笑みを浮かべる。

「ねぇ、篠山さん」

「はい？」

「僕のーー…守護犬（ガーディアン犬）になってくれない？」

……は？

3

守護犬……？
つーか……犬？？？

「あの、おっしゃってる意味が分からないのですが…」

分かるわけねぇよな！！！
守護犬って初めて聞いたぞ！？

「言葉通りの意味だよ？」

これで分かるでしょ？と、言わんばかりの口調に、内心のイライラを押し隠しながらも表情は心底困った、ような表情を作りあげる。
おまけとして、声には少し”仕事しすぎで頭のネジ抜けたんですか”という憐憫の意志も含める。

え？馬鹿にしてるって？

ははははは～、そんなバナナ～（自爆してしまえ私）

「あの…すみません、さっぱり分からないんで……す、…が？」

が、の部分になると声がかなり裏返ってしまった。
一オクターブどころか二オクターブも上がってしまった。いつもなら、この歳になって今だそんな情けない声を出すとは…と歎くところだが、
今、この時だけはそんなこと考えるどころではなかった。

な、なんで……
なんで、なんでこんなものが！！？

目の前に突き付けられたソレに思考が全く停止してしまった。
そのまま気絶したい、気絶して何もかもを無かったことにしたい…！！と思うのだが、そういう時に限って妙に頭が冴えてきてしまっている。
いや、冴えているというより…頭の中がグルグル回りすぎて、３６０度回って戻ってきてしまったという感じだ。

なぜ…なぜ、こんなもんを…高峯　優夜が…？？

今まで目の前にあるソレに釘付けになってしまい、彼の存在を忘れていた。
いや、むしろこんな私の黒歴史とも呼べるブツを突き付けてきた張本人を忘れていてどうするんだ！！！

勢いに任せて（実際はかなりゆっくりと）瞳を見上げる。

「……ぅ」

そこには、もう…後光が射さんばかりに微笑みを浮かべていらっしゃる天使ーー…否、悪魔がいた。

「これ、篠山さんだよね？」

「……」

「いつもどこかで見た顔だよなぁって思ってたんだ。だから、つい先日これを見つけた時はビックリしたよ」

「………」

「もう数年前くらいだからかな？　あんまり小さい店だと見つからなかったけど、この前、これを持ってる友人に見せてもらってね」

「………」

「初めは本当に篠山さんかな？って疑っちゃったけど、よく見れば…うん、なるほどね。確かに篠山さんだ。眼鏡を外して髪色を変えればまさしくーー…」

「……っ！！いい加減にしてくれませんか！！？」

人が黙っていれば、ペラ…と！！！！

「私はもうコレとは一切関係ないんです！！今更、そんなもん出してきて何だって言うんですか！？」

あぁ…！！思考が回りだしたら、怒りも沸き上がってきた！！

この野郎、高峯！！

てめぇ、ツラがちょっとばっかし整ってるからって調子乗ってるんじゃねぇぞ！！！

「高峯さんがどういうつもりなのかもしれませんが、それに関してはもう数年前に手を切ってるんです。それを今になって…迷惑です！！守護犬だか何だかも知りませんが、高峯さん、お仕事のやりすぎで疲れすぎていらっしゃるんじゃないですか??今日は早く帰ってお休みになることをお勧めします。そして、こんな訳の分からない戯れを二度となさらないで下さい。冗談にしても、やっていいことと悪いことがあるのはご存知ですよね?私も今日は高峯さんがお疲れということで気にしないことにしますから。」

そして手近にあったグラスの中を全て飲み干す。

う……っ！！いだだっ！！

これアルコールなんぼ入ってんのよ！！

ジンジンと痛む喉を気にしないようにしながら、高峯　優夜から視線を外した。

言外に”帰れ”と言っているのだが、分かってくれるだろうか。

いや、分からなくてもいい、とにかく帰れ！！（無茶苦茶）

今からもし隣のやつが話しかけてきても何も反応はすまい…と思っていたのだが、つい反応してしまった。
心底楽しげに笑う奴の声に。

「……っ、ははは！！」

楽しくて堪らない、とばかりの笑い声が静まり返ったバーでは異様なほど響く。
バーの何人かは、何事か？と視線を寄越してくる。

「……っ、くく…はっははは」

高峯　優夜って笑い上戸？
それとも、やっぱり仕事のしすぎで頭のネジが外れたのかな。
いい気味…じゃないか、ご愁傷様。

初めはその程度に気に止めていなかったが、あまりに笑うものだから（馬鹿にされてるみたいで腹立ってきた）いい加減イライラしてきた。

あんたね、
その馬鹿笑いをいい加減やめなさいよ！！
場所考えてやれっつの！！ここは仕事や私情で疲れた世人がつかぬ間の静寂に身を委ねる楽園なんだぞ！？
てめぇみたいな、全身勝ち組野郎が本来来ていい場所なんかじゃねぇんだわ！！

だんだんと違う方面で高峯　優夜に怒りが向かっていくがそんなことは気にすることではなかった。はっきりと共通して思うのは、私は高峯　優夜が…大嫌いだということだ。

「マスター、お勘定置いとくわ」

こいつの横にいると、癒されるものも癒されない。
さっさと立ち去ろうと腰を浮かせようとするが、それを高峯　優夜に押し止められる。

「…何か」

もう話しかけんじゃねぇっつの。空気読めや。

「篠山さんて、思ってたより面白いんだね。ますます君に守護犬に

なってもらいたいな」

は！？

まだそんなネジが一個も二個もぶっ飛んだ話をしてやがるのか。

「意味が分かりません。失礼します」

お前なんかに面白く思われたって嬉しくも何ともねぇわ。

…とは、言わずにジロリと彼を睨んだ。

しかし、高峯　優夜はそれを楽しげに…いや、むしろ馬鹿にさえしているような薄ら笑いを浮かべていた。

「篠山さんって、結構世間知らずなんだね」

世間知らず、と言った彼の言葉には明らかな嘲笑が混じっていて思わずピクリと片眉が上がった。

世間知らず……??
この…っ、お茶くみＯＬというなけなしの給料で毎日を精一杯生きている私に向かって……世間知らず！！！

「どういう意味でしょうか？私は、貴方に世間知らずなどと呼ばれる覚えはないのですが」

落ち着いて言葉を紡ぐが、ヒクヒクと頬が引き攣ったのは仕方ないと思う。
しかし、それでも高峯　優夜は余裕という二文字を全面に押し出した胡散臭い笑顔を返してきた。

「うん？だから、言葉通りの意味だよ？篠山さん、どれほど自分が有名なのかわかる？」

「……は？」

「ほら、やっぱり分かってない。だから世間知らずなんだよ」

幼子に言い含めるような口調に、滅多に切れない血管が一気に何本

もぶち切れそうになった。

この口調や微笑みが、
紳士的で優しいなんて言ってた奴の首根っこ引っつかまえて見せつけてやりたい！！！
この似非紳士野郎！！！
外見は天使だろうが、中身は悪魔だ！！いや、悪魔なんて生温いくらいかもしれない！！

「篠山さんはね、今も結構有名なんだよ？すごいね、いきなりいなくなって五年間もあるのに、君の出演作はいつも人気らしいよ」

「……だから何ですか」

背中がやたら寒い。
あぁ…、なぜだろう。この続きを聞いてしまったら…私のずっと大切にしていた平穏という名のオアシスが一気に崩れる気がする…

「分からないかな？そんなに人気な君をもし…君のファンが知ったら…「ストォオォオオップゥウウ！！！」

はぁ、はぁ、はぁ…
肩で息を繰り返しながら高峯　優夜を見下ろす。
突然大声を上げながら立ち上がった私を高峯　優夜は相変わらず楽しげに見つめていた。

店の視線が一斉に集まっていたが、そんなこと気にする余裕などなかった。
ないほどに、私は動揺していた。

この男は……っ！！
この男は今、何を言おうとした！！？

聞いちゃいけない。
この悪魔に関わってはいけない。
関わったら最後、生命力の全てをすっからかんになるまで搾り出された挙げ句、使い終わった瞬間、ぽいっと捨てられるのだ。

ーーーーーー…帰ろう

そのままお金を置いて帰ろうとしたが、腕を捕まれた。

「帰ります。離してください」

「逃げるの？」

誰が逃げるか！！！

思わず叫び返そうになるのを意思の力で捩(ね)じ伏せる。

ダメだダメだダメだダメだ

こいつの挑発に乗っちゃだめだ！！挑発するのはこいつの策略。

さっさと帰るのが今は一番の策だ！！

逃げるが勝ち、まさにこれよ！！

平穏のためならば私のプライドなんて一つや二つ捨ててやるわ！！

あはははは！！

「もう話すことなどありません。失礼します」

「……ふぅん、じゃあ、これ。バラしてもいいんだ？」

「バラしたとしてそれは過去のことですし、第一、皆さんが信じるか信じないかは…誰にもわかりませんから」

言いたいなら言えばいい。
ただ、私は否定も肯定もしない。
この五年、私がいかに地味子生活していたか舐めんなよ。
人の噂も75日というし、それくらいなら全然耐えられる。
いや、耐えてみせる。

「と、いうわけですから、失礼します」

何度目かの失礼します、に、今回は”かかってこいや!!”という意味も込めて笑ってやった。
まぁ…唇をくいっと上げただけだから、見ようによってはホラーかもしれなかったが。

高峯　優夜は、一瞬だけポカンとした顔をした（ははは、まぬけ面め〜。ちっ、写メ取ってこいつのファンに売りさばけば生活費の足しになったのに!!）が、なぜか次の瞬間には腹を抱えて笑い出した。

それには、私はもちろん、息をのむようにしてこちらを伺っていた店の常連さんも目を丸くしていた。

「ははははは！！！面白い、やっぱり篠山さんって面白いよ！！」

はっ、あんたを笑わすために存在してないんですがね、私は。
むしろ、数あるあんたを”大好き”だという女たちの例外として存在してるんですよね。
”大嫌い”代表としてな！！……いや、代表はやりすぎか？

付き合ってられない、帰ろう。とは思うが、なぜか腕を捕まれたままで帰れない。
力いっぱい引っ張ってるはずなのに、一向に外れない。
というか、だんだん掴む手に力が加えられてるように感じるのは気のせいか？

「離してくれませんか、帰りたいんで」

しかし、その拍子に更に腕を握る手に力が入った。

微妙に痛いんだけど……？

「待って。俺、結構智美の事気に入った」

……ん？
おい、今この男何て言いました？
ツッコミ所がありすぎて、どこからツッコミ入れればいいか分からなくなったよ。

え～と、箇条書きにしてみよう。

1、一人称が僕→俺

2、篠山さん→智美（下の名前だし、呼び捨てかよ！！）

3、気に入ったらしい。…何を？いや、考えたくない。聞こえなかったことにさせて！！お願い！！

とりあえず、1について突っ込んでみた。

「本性だと俺、になるんですね」

「はは、本性とか面白いこと言うね。僕ってのは仕事で使うんだけ

ど、一応プライベートでは俺なんだ」

あ、そう。
別にあんたのプライベートなんてどうでもいいんですけどね？

「智美には俺でいいかなって思ってね。これから付き合いも長くなることだし」

こいつ！！ちゃっかりまた智美とか呼びやがった！！
お前に呼ばれるために智美って名前はねぇんだよ！！図々しいな！
……て、違う違う違う！！
一番突っ込むべきは…

「長い付き合いって何ですか」

私は金輪際、
あんたとは1ミリも関わらないで生きていくつもりなんですけどね。

「長い付き合いは付き合いだよ。智美は今日から俺の守護犬になるんだから」

「…承諾した覚えはありませんが??」

あぁ……っ、イラつく。
こいつの綺麗な顔ぶん殴りたい。仕事やめる覚悟さえあれば、殴りつけてやるのに…っ!!

「承諾するしかないよ、智美は」

決定事項だ、と言わんばかりの高峯　優夜にこめかみがピクピク痙攣する。

話の通じない馬鹿と話す気分とはまさしくこんな気分を言うのだろう。

「だから承諾するつもりはありません。先程のことならばバラしても構わないと言ったでしょう?人の噂なんて、たかが知れますからね」

「そうだね、周りにバラしたとしたらたかが噂で終わってしまうけど…俺がバラすのはそっちじゃないよ?」

「……はい？」

「知ってる？智美って、今だあっちで捜し求められてるの」

すー…っと血の気が引いた。
引くなんてもんじゃない、血という血が足から地面へ流れ落ちたような気がした。

「一体何を…」

「五年前も、泣いて縋るのを振り切って辞めたんだってね？その人たちが、まだ智美のことを諦めてないって…知っていたら、俺はどうするかな？」

にっこり…そう、にっこりと微笑んだ。
ぶるっと身体が震えて、指先から足先まで寒気に襲われた。

こいつは……やる…っ。

顔色が変わっていくのが自分でもわかった。
そして、目の前のやつの顔がそれにつれて笑みが深まるのも。

「ねぇ、智美。どう思う？」

「あ……」

答えられない…。
やばい、このままだとこいつのペースに負ける…っ！！
そう分かってはいるが、何を言い返せばいいか分からない。

人の噂なんてどうにもできる。
だけど……もし、もし、あっちの人たちに知られたら？
もし、まだあの人たちが諦めていなかったとしたら？？

最近、あっちについては極力関わらないようにしていたたむの認識不足に頭を抱えたくなった。
きっとこの高峯　優夜もそれを分かってるから世間知らずだと言ったのだろう。

あぁ！！腹立つ！！！
こんな胸糞悪い奴にやりこめられているなんて！！！

「でもね、智美のことは俺も気に入ったから、わざわざ教える気もないんだよね。だから取引しようよ。俺はこれをバラさないし、誰にも話さない、智美がバレないようにも協力する。その代わり、智美には俺の守護犬になって欲しい。ね？ダメかな？」

目の前で微笑む顔に、殺意を覚えた。

これは天使なんかじゃない。
こいつは、外見も中身も……大魔王だ。

そして、大魔王に小市民である私が敵うはず……ない。

「……守護犬って何をすればいいんですか」

苦々しく呟いたそれに、高峯　優夜は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう、智美。いや、ＳＡＬＡ？」

耳元で呟かれた美声に背筋がぞくっとした。
もちろん、気持ち悪くて。

ＳＡＬＡこと、元ＡＶ女優、篠山　智美はその日、大魔王と契約を結んだ。

4

人をマジで殺したいって思ったことはありますか？

私は……

あります。

今、まさに殺したい奴がいます。ただ、殺すだけじゃ飽き足らないっていう気持ちもあるけど…。全ての苦痛という苦痛を味あわせてから、奴を煉獄の中へと叩き落としてやる！！

「智美、どうしたの？そんな怖い顔して」

「何でもないです…高峯さん」

誰のせいだ誰の！！！
そうは思いながらも口には出せないこの辛さ…！
しかも、それをよぉく分かっているのか目の前で殊更ニコニコと微笑む高峯　優夜の顔を引っ掻きたくなる……あ、でも私は今深爪だったよ。チッ、奴に傷痕を残すためにも爪、もう一度伸ばそうかな。

「智美は本当に面白いね」

クスクスと上品に口元を指で押さえながら笑う奴に、怒りのボルテージはすでに振り切ってしまい、また一から怒りゲージを溜めている。
私は人生でこれほど何回も、そう…っ！何回も怒りが溜まったことなどない。
それを考えると、高峯　優夜は一生のうち出会えるなら出会いたくなど決してなかった天敵のうちの一人に匹敵する。
匹敵するどころか、キング　オブ　ザ　天敵　かもしれない。

本当、ろくなことがないよ…私、今年は厄年だったのかも。

今からお札を買っても間に合うだろうか…と絶望的な気分を味わっていると耳に、先日から嫌というほど聞くことになった女たちのアレが聞こえてきた。

「信じらんないっ！！あいつ、何様なのよ！あんな地味ブスのくせに！！」

「きっと、しつこく纏わり付いてんのよ！！あの方が優しいからって最っ悪！！」

「今までおとなしくしてたのは、ああいうためだったのね。何て卑しい人なのかしら！！」

グサグサと容赦なく突き刺さる言葉のナイフ。今までは道端の石ころ並に存在認識さえされていなかったのにこの始末。
きっと、今月の私の運勢は底辺の中の底辺なのかも知れない。それか、誰かに呪われているとか……ふふ、今さらよね。
呪われてるのは当たり前じゃない…だって、私の横にはそれはもう清々しいほどの笑顔を浮かべる疫病神がいるんだから。

「今日はどこでご飯を食べようか？」

おいっ、わざとらしく肩を抱くんじゃない！！
ほらほらほらっ！！
後ろから殺気という名の矢がトストストストス背中に刺さってきてるからっ！！！
もーっ！！今週の休みには、神社で厄払いしてこようかな！？
この殺気は半端じゃないし！私の命がいくつあっても足りないよ！？
きっと、今日の夜には私の家に何十人という生き霊が現れて私を絞め殺しに来るかも……ゾゾッ

「あ、あの…お昼くらいは別々にしませんか？」

あんたと同じ空気吸いたくないのよ！！
お願いだから昼休みくらいは私に新鮮な空気を吸わせて！！
あんたがいるせいで私の仕事場はまさに針の筵（むしろ）…。
空気も吸えてんだか吐き出せてんだか分からないのよ！

「でも、僕はなるべく一緒にいたいんだけどな？ほら、夜のデートもたまにしかできないし」

いけしゃあしゃあと何を言うか、この似非紳士め。
あんたとはデートなんて甘ったるいもんした覚えはありませんけど

！？覚えがあるのも嫌だけどなっ！
残念だ、とか言うけど面白がってんのバレバレだから！！
その気持ち悪い笑顔やめてよ！鳥肌が立って仕方ないの！

「高峯さん忙しいから仕方ないですよ…。私は気にしないので、今は身体を休めることに専念して下さい」

暗に、デートなんてするか。する時間あんならあんたは家で引き込もってな。と含める。
憎たらしいほど察しの良い彼ならば、私のさりげない刺に気づくだろう。
案の定、キラリと面白がるような…それでいてまるで獲物を逃がさないとばかりの肉食獣の瞳を浮かべる。
その瞳には今だ慣れない。ドキッともしないが、本当にこいつには骨の髄まで弄ばれそうで本能的な危険信号が点滅するのだ。
高峯　優夜は唐突ににっこりと微笑む。その微笑は人好きする彼の美貌を柔らかく、さらに人なつっこいものへと変える。
後ろで「キャァァ」と黄色い歓声が聞こえるが、私からしたら別の意味で「キャァァ」だ。いや、「ギャァァァ」と叫んだほうが近いかも。
顔をひくつかせる私を高峯　優夜は優しげに瞳を細めて見つめる。

「……嬉しいな、智美が僕をこんなにも気にかけて心配してくれるなんて」

うぜぇえええ！！！！
めっちゃうぜぇこと言ってきましたよ、この人！！！
わざとだと分からない私ではないが、それでも表情まで凝った彼の演技には身震いが止められない。
ドン引きする私を楽しげに見つめてから、彼はふっと微笑むとそっと私の耳元に唇を寄せた。

「残念だったね。俺は何と言われようが…関係ないよ？」

ゾクッとした。
疫病神はやはり疫病神だ。私を最大限に利用しつくすまで離さないつもりなのだ。
……殺すっ。
こいつだけは絶対に殺すっ。

しかし、私は気づかなかった。
こいつの宣戦布告に闘志を燃やすあまりに彼が最後にした行為が遠巻きに見ていた女たちからすれば、ラブラブな頬チューに見えただなんて…

奴との苦行とも呼べる昼休みを終えて戻ってきた私のデスクには、これを一人でやれと!?と怒鳴りたくなるような仕事の山ができていた。
まるでチョモランマのように積み重なる仕事に、私は遠い目をして現実逃避しかかる。

「早く仕事しなさいよ、あんたはこれくらいしか取り柄ないんだし」

「あぁ…あとは同情を引いて男を惹きつけるすべかしらね」

「それとも身体とか?はっ、プライドもないなんてね」

好き勝手に言う女たちを無視して椅子に座る。
とりあえず仕事を片付けようと、仕事の山の一つに手を伸ばした途端にチクっと指に痛みが走る。
右手の人差し指に、何かが刺さったような跡ができる。
ぷっくりと血が浮き出るのを見ながら、積み重ねられた仕事に隠れるようにして置かれた画鋲を発見した。

「餓鬼くさ…」

ここは小学校か！？と問いたい。クスクス笑い声が聞こえるが無視して、引き出しに入れていた絆創膏で血止めをする。
女たちの陰湿な嫌がらせはあるだろうなぁ…と覚悟していたが早過ぎではないか。
これから、あいつとの契約が終わるまでこの嫌がらせを受けなければならないのかと思うと気が重い。

「……はぁ」

透かした奴の顔に何十発かの顔面パンチを喰らわせる想像をしていたら、幾分か怒りが収まった。
上司も男性社員も、女の醜い争いには関わりたくないのか無視を決め込んでいるのはよく分かっている。だって、私が彼らの立場なら絶対そうするからだ。
だから恨みもしない。
ただ、お騒がせしてすいません。という申し訳なさだけが生まれる。

私のせいじゃないけど。
全部…ぜーんぶ、あの疫病神のせいだけど！！！

あいつにアレがバレたのが、まず私の最大の不運だった。
私は以前……ＡＶ女優をやっていた。若気の至りというか…街角で

やらないかと声をかけられ、あの頃はつまらない平凡な日常に辟易していた私は相手が驚くほどあっさりと頷いた。
些か簡単に承諾しすぎやしないか、と言われたけど、私のほうは声をかけてきた相手にお説教みたいなのをされていて不思議な気持ちだった。
親もたいして私や私がしてることに興味を示していなかったから、こうやって説教じみたことをされるのは新鮮で、それだけでつまらない日常に色が付けられていくんじゃないかという期待に胸を膨らませていた。
それから、もう一度私に確認を取る男に私は再び頷いた。
男は佐原さんと言って、それからは私のマネージャーになった。どうやら私のことを心配して社長に言ってくれたらしい。
全く、声をかけてきたのは佐原さんのほうのくせに、彼は私をまるで自分の妹のように気にかけてくれた。
佐原さんは私にとっても兄みたいな人で、私は彼が大好きになった。もちろん、恋愛感情はない。彼は家庭もあったし、私も彼も互いにそんな感情を持ち合わせるようなことはしないよう一線だけは引いていた。
彼の献身的なマネージャーぶりと、私の持って生まれた才能（と呼んでいいか分からないが）に、私の名は少しずつ、だが確実に売れていった。
そりゃあ、知らない男と、しかも周りに人がいる中で寝るというのには最初は緊張したけど、さすがに男優なだけあって、そんな視線が気にならなくなるほど気持ち良くさせられた。
もともと、私は本当に好きだという気持ちで男と付き合ったことはない。
初めてのキスも、Hもただなんとなくしただけ。
そう考えると、私は本当の意味でのキスやHはしたことないのかもしれない。
愛しいという気持ちがどういうものか分からなくて。

私がそんなだから、今まで付き合ってきた男たちは失望しながら離れていった。
私はそんなの気にしていなかったけど。

愛しい気持ちに、愛しい気持ちを返さなきゃいけないなんて誰が決めたんだろ？
貰って返して…そんな面倒なものなら、私はいらない。
それを考えるとＡＶ女優は本当に楽だった。
気持ちなんて考えなくていい。
ただ、気持ち良さのまま身を委ねて、欲望という本能のままに相手を求めればいいんだから。

そんな私は、いつの間にか伝説のＡＶ女優とまで呼ばれるほど人気になっていった。
だが、人気になればなるほど注目度も高まる。
見る人が見れば、その伝説のＡＶ女優が私だと気づくだろう。

だから、辞めた。

このまま私だとバレるのは面倒だし、何よりＡＶ男優たちや他の男に仕事でなく求められるのがウザかった。
佐原さんは私が辞めると言い出すのを分かっていた。
彼は「残念だけど仕方ないか」と納得してくれて、一緒に社長に言いにいってくれた。

社長は私という看板がいなくなるのをすごく渋っていたけど、それほど良識のない社長ではなかったから最後には了承してくれた。
もともと、ＡＶ女優も長くは続かない職業だ。
それならば、まだ私が若いうちに違う仕事を見つけるのは良い選択だろう、と微笑んでくれた。
私は佐原さんと社長にお礼を言って、それからはスッパリとＡＶ女優を辞めた。
最早伝説とも呼ばれる私がいきなり辞めたのを、一時期は騒然としたけども、だんだんとそれは収束していき……私は今、五年目のＯＬ生活を迎えていた。
佐原さんとは時折連絡を取っている。彼も今はＡＶ業界を辞めて小さな喫茶店の店長をやっているらしい。
時は流れるものだ。
過去は消えずとも、それが思い出となるのは簡単。
だからこそ、今はひっそりこっそり生きていこうとしているのにー……っ。

「あの野郎…絶対に許さん」

私は、私の平穏を乱そうとしている異分子に怒りを禁じえなかった。
守護犬…それは奴の（仮の）恋人。
そう、私は契約期間の半年間、あいつの恋人を演じなければならないのだ。

5

「あ～…マジねぇわ。つか、こんだけの仕事よく回せたよな」

たんまりと溜まった仕事の山（まぁ、素敵☆）を横目で見ながらうんざりとした溜め息を零す。就業時間はとっくに過ぎてしまい、今オフィスにいるのは私だけだった。
夕飯も食べずにとりあえず仕事を…と思っていたが、さすがに疲労には食欲が沸き上がる。
ちくしょう…今日は家で簡単なものを、とでも思っていたけど、なんか食いに行きたい気分だわ。何食おう？やっぱ肉か！肉しかないよね！？こんなにイライラした気持ちには肉にがっつくしかないよ！！
三十路にあと少し…という女が一人で肉をがっつく姿は正直イタイ気もするが背に腹は代えられない。
がっついてやろうじゃないか、肉を！！ついでにビール飲みまくって酔っ払ってやる！！

ぐ～…と再び、腹から催促の音がなる。
よしっ、やるぞ！と仕事の山を一睨みしてからまた仕事に取り掛かろうとしてーー…

「……くくっ」

誰かの笑い声に邪魔された。
うん、邪魔。かなり邪魔。誰かなんて知りたくもないから無視しよう、無視。ここで反応したらダメだ。絶対にダメ。
私は、笑い声なんて聞こえていないかのようにそのまま作業に没頭することにした。
カタカタとキーボードを叩く音の他に、コツコツという不吉な足音も聞こえているような気がするが、あくまで”ような”なので無視することにする。

カタカタカタカタ

コツコツコツコツ

二つの音が、静かなオフィスに交わりあう。
デスクにのっけてあるミニ時計を見ながら、時刻が8時ちょい前なのを確認。
8時って不吉な悪魔でも呼び寄せやすい時間なのかな…と思いながら、改めて仕事を押し付けて高らかな笑いと共に帰って行った馬鹿な同僚たちが頭によぎる。

そんなに悪魔と仲良しになりたいなら、仕事すればいいのに…。

はぁ…と、でかい溜め息をついたままそれでも手を止めることはしない。
コツ…不吉な音が鳴り止む。
背後から異様〜な気配を感じるが、あくまで…以外略。
一向に振り向かない私に、不吉な悪魔も対抗してか何も話さない。
緊迫感溢れるオフィスの中で、冷や汗をかきそうになりながらも私は負けて溜まるか…！！とキーボードに向き合う。
ＯＬ五年の実績なめんなよ！！
これくらいの仕事ちょろいぜっ。
ふはははは！！と叫び出したくなるのを堪えながら、先程よりも遥かにパワーアップした私は仕事の山をみるみる平らな平地へと変えていく。
最後に打ち終わった瞬間には、どこからか試合終了のゴングが鳴ったかのような気がした。

やったぁあああ！！！
終わった！！私は無事仕事を終えましたよ！先生！！（誰？

思わずガッツポーズをしてしまい、後ろから聞こえる悪魔の笑い声に現実へと戻る。
まだいたのか…。これ以上無視することはさすがにできないだろう。
うんざりする気持ちを隠そうともせずに、私は後ろを振り返った。

「……お疲れ様です、高峯さん」

「うん、お疲れ。智美は仕事をするのが早いね、さすがだよ」

は？お前に言われても、厭味にしか聞こえねーよ。
つか、ずっと後ろで見てただろ、てめぇ。んなの後ろで見てる暇があるなら手伝え。つか、帰れ。

「そんなことないです。高峯さんこそ、いつも皆さんより数倍の仕事をこなせるって皆さんが言っていましたよ」

「一応、管理職だからね。それくらいはやって当然だよ」

うちの課長はそうじゃないけどねー。引き出しにあるキャバレーの名刺を、うへへって眺める課長だけどねー？
おまけに、こーんな仕事を私一人に押し付ける女たちを笑顔で返しちゃう糞野郎だしさぁ。

「そうなんですか。やっぱり管理職のかたってすごいんですね」

当たり障りのない言葉を言って、さっさと帰ろう…と席を立つ。しかし、頭を下げようとしたところで高峯　優夜は不思議そうな顔で首を傾げた。

「どこ行くの？智美」

「……家に帰ります」

「忘れちゃったの？今日は一緒に食事しようって言ったじゃない」

「……はぃ？」

は？何それ？
そんな約束した覚えないんですけどー。
つか、する覚えもねぇし。

「そんな約束しましたか？」

「したでしょう？昼休みに」

あぁー…あの芝居か。

「あれは、ただの芝居じゃないんですか」

「芝居？智美はそんなふうに思ってたんだ。違うよ、芝居なわけないじゃん」

完全に砕けた口調になる高峯　優夜を私は胡乱げな目で眺めた。
そうだ、仕事は就業したわけだし…もうこんな奴に付き合ってやる必要ないじゃんね。

「私は芝居の一環だと思ってましたよ。失礼します」

立ち去ろうとしたが、通り過ぎた時に腕を捕まれる。
うざっ！早く離せ！
叫びだしそうになるのを我慢するが、目を取り繕うことはできないし、するつもりもない。

「離して下さい。帰ります」

「一緒にご飯食べて帰ろうよ。待ってたんだよ、俺」

「そうですか。それはそれは…ありがとうございます。ですが、私にはこれから急に入った予定があるので」

「嘘が下手だね、智美は。それに、どんな予定でも俺と一緒に食事するって約束のほうを先にしたんだから断ってよ」

「は？」

何言ってんだ。
てめぇとの約束なんぞ約束のうちに入らねーからな。
約束したとしても、優先順位が最下位になるのは当たり前だろ。

「すみませんが、それはちょっと…」

嫌々と首を振る私に、高峯　優夜はそれはそれは恐ろしい笑顔を私

に向けた。

「ねぇ、智美はさぁ……俺の彼女なんだよ？だからさ、ほら…一緒に食事行こう？」

行こう？と相手の意志を聞いている風なのに、私は「一緒に食事行くに決まってんだろ、ボケが。嫌々言ってねーでさっさと行くぞ、分かったか？あぁん？」と聞こえた。

ぞ～…っと背筋が凍えた。
ねぇ？何だろ…奴の背中から真っ黒な翼があるように見えてるんだよなぁ…。
あはは、奴も一応人間だったように記憶してたんだけど…翼？真っ黒な翼とか…え？
しかも、今にも奴のデコから角がにょきにょき生えてきそうなんだけどー？
あぁ～～さむっ。
マジさむーい……。

「さぁ、行こうか。智美？」

「……はぃ」

私に取りつく死神は、翼と角も持っているようです…。
てか、智美って呼ぶな。
……呪われそうだから

6

何がどうなって、こうなるんでしょうかね…

「ここは、和食としてはかなり有名な店なんだ。智美は和食好き？」

「えぇ…まぁ」

ニコニコと薄ら寒い笑顔で話しかけてくる高峯　優夜に正直私はドン引き。
そんな馬鹿みたいな親切面したって、私にはあんたの正体を知ってるんだからな！！その”Ｔｈｅ　紳士”…とでも主張しているかのような、お上品な仮面がいちいち気持ち悪い。
よくこんなのがカッコイイなんて冗談ではなく本気で言えるものだ。
私は理解したくもないし、するつもりもない。
さっさと”契約”という名の鎖から解き放たれるといいと思う。
ふん、守護犬とはよく言ったもんだよ。
外面だけ（↑強調ポイント！）はかなり良いこの男を身を呈して守る犬（＝偽彼女）。
おかげで私は平穏無事にと願っていた職場では針のむしろ状態…。
何たる不運だろう。
ひっそりと生きて行こうと決めていたのに、まさかの仕打ち。こんな奴に目を付けられてしまった時点で、私は神に見放された存在だと行っても良いくらいだ。

残念だ…
残念すぎる……っ！！

そりゃ、この金持ち優良美形（もれなく出世もついてきます）を舌なめずりして待ち構える女たちのあのチーターというよりは、骨の髄まで食い尽くそうとしているハイエナの如くのような有様は恐ろしいが…。
あーぁ、ハイエナの贄として捧げられるのか…きっと、身という身を全て剥ぎ取られるんだろうな…。
地味子人生よ…カムバック

「こっちだよ、智美」

この店は全室が小部屋のようになっていて、襖で一つ一つの座席が区切られていた。
他人に邪魔されず心おきなく連れと食事をし、話ができる配慮に配慮を重ねた店は私の非常に好みでもあった。
無駄に聞こえる他人の馬鹿笑いの中で食事するのは何よりもイライラする。
だから、私は普段は外食などほとんどしない。
自分の手料理が特別うまいというわけでもないけど、部屋で温かい湯気を醸し出すご飯や出来立てほやほやのおかずを見るとホッと息がつける……こんなことに息がつけるようになった自分を見たら、

数年前の自分が驚きそうだけど。
とにかく、そんな外食なんて滅多にしない私でもこの店はたいそう良い店だと分かったし、何より、その店の素朴で控え目な上品さを兼ねた雰囲気はとても好ましい。
田舎者よろしく、あちこち視線を巡らす私を見て奴はしてやったり、とでも言うような笑顔を浮かべていた。

まさか私の好みを知っていた…？
いや、まさか。
そんなはずはないないない。
つか、実際にそんなはずあったら気持ち悪すぎるんですけど！！
お前は私のストーカーか、ファンか！！どっちも断固お断りする！
てめぇはてめぇで、その麗しい美顔でも駆使して女たちとよろしくしてろ！

さりげなく肩や腰に触れてエスコートする高峯　優夜に女性店員はうっとりと頬を赤らめ、次いで夢のようなエスコートされているのが私だと知ると、ぎょっと目を剥いて睨みつけてくる。
おーい、店員なら外面のスマイルくらい維持しとけ。
何だってこんな男は、数々の女を落とせるにも関わらず私に構ってくるんだろうか。
私に惚れてる……うわー…想像しただけで鳥肌が…。
それだけはないな、うん。
第一、（仮）彼女をやらせるくらいだから、私がこの男を好いているとは間違っても思ってないはず。
あからさまに嫌いな態度で接してるしね、私。これで、そんな間違いをしているようなら修復不可能なナルシストだ、こいつは。
ふと、視線を感じて伏せていた目を上にあげると高峯　優夜が心底

面白がっているように私を見ていた。

「……何ですか、高峯さん」

「いや？智美って、よく見るとくるくる表情が変わっていくから可愛いなぁって思ってね」

ゾワ…

髪の毛先の一本一本に怖気が増してピンと張ったような気がした。

「面白い、の間違いじゃないんですか」

「まぁね、でも面白いと可愛いは俺にとって同義なんだよ」

余裕ぶって紳士スマイルを繰り出す高峯　優夜に私は眼鏡越しだが胡乱げに眺める。

この男は、私のことを”可愛い”などと平気で口にできるほどなのに、なぜ私なんかを”守護犬”もとい”偽彼女”なんかにしたのか甚だ疑問でしかない。

私より可愛い、もしくは綺麗な子などこの広く狭い日本には、星の

数ともいえるくらいたくさんいる。
ＡＶで売れたのだって、顔の可愛さというより男の抱く欲望や夢を忠実に表現しうるだけの女の欲望を私も見せただけだ。
実際、わざとしていようがいまいが私の顔は実は結構な地味顔なのだ。化粧をしても、いかんせん華やかさが足りない。
野暮ったい眼鏡をしているからだとも言われるが、この眼鏡は私の相棒。
まさに生きるためのＰａｒｔｎｅｒといってもよい。
旦那よりも人生の苦楽を共にすべき、相応しいものといえば眼鏡しかないと私は思う。

それはおかしい？
いいじゃないか、一人くらい眼鏡に愛を持ち込む女がいたって…

「…何してるんですか」

眼鏡越しだからあまり威力が働かない睨みを効かせると、高峯　優夜は伸ばしかけた手を流れるような動作で、グラスに向ける。

「乾杯しよっか？」

グラスの縁をつまみ、ゆらゆらとグラスを揺らす。
でも、私は自身のグラスに手を伸ばさない。

「今、私の眼鏡に触ろうとしました？」

疑問形でありながら、ほとんど肯定的に言うと高峯　優夜は悪戯がばれてしまった子供のような顔をして笑う。

「気付いたんだ」

「気付きますよ、普通」

一体私をどれだけ鈍ちんだと思ってたんだ、こいつは…！！
確かに私の姿は地味で地味でさらに地味だけど、これでも体育の評価はいつでもオール５だったんだからね！！
なめんなよ！地味を！！

「私ってそんなに鈍く見えますか？」

「うん」

そして奴はにっこりスマイル……コロス。

笑顔に殺意って芽生えるんだ～、あははは。
知りたくなかったなー…。

うんざりした気持ちを隠しもせずにグラスを掴むと、高峯　優夜がグラスを突き出してくる。

「乾杯しよう？」

「……」

悲しいかな、下積み下っ端ＯＬ人生。
こんっっな糞みたいな悪魔やろうでも上司は上司。逆らえないのは世の不条理だと思わざるを得ない。

「……はい」

無念…っ！！
身分ゆえの敗北に泣く泣くグラスを差し出すと、カチャンと小気味よい音と奴の楽しげ～な…というより意地の悪い勝利の”乾杯”が聞こえた。

7.

……美味しい。

美味しいんですけど！ここの料理！！
目の前に並ぶ海鮮尽くしの小料理たちに私はメロメロというか頬がとろとろ～になっていて、うっとりと口の中で吟味する。
向かいで同じく麗しい海老ちゃんや蟹ちゃん、さらにはマグロやウニ様たちを堪能する男はいけ好かないことこの上ないが、この料理を味わえたことは、幸運！の一言に尽きる。
ぷりりん！と存分に身が詰まった新鮮な彼らは、私からしたらダイアモンドの輝きよりもさらに眩しく見えた。

２７歳独身お茶くみＯＬといえば、若かりし頃には夢見ていたブランド品や数々のファッションより、少しでも歳を若く見せ、かつ歳老いた時に気になるシミやシワの予防を万全とさせた化粧品グッズに金をかけることが多くなる。
後は酒。酒とつまみ。
これを侘しい独身生活の金曜の夜の恋人にしながら、日頃の疲れを癒す。
これだけやって、後は家賃だなんだ、さらには結婚祝いの資金などを差し引いてしまうと、悲しいかな。
このように贅沢な食事にありつくことが滅多になくなる。
ありつける奴もいるにはいるが、はっきり言おう。

私はありつけない組だ。
お茶くみＯＬの給金なめんなよ！寿祝いの金額なめんなよ！
…密かに貯めている老後預金なめんなよ！

老後預金、というくだりを思い出すのは止めよう。
せっかくの料理たちが味気無いものになってしまう！
今はこの山海の珍味たちを楽しまないと損だよ、損！

「気に入ってもらえたみたいで良かったよ」

おっと。そういやいたんだったよ、こいつが。
料理に夢中で存在が掻き消えてたわ。ついでにそれが現実になってくれてたら、すごぉーく有り難いんだけどねっ！

「今、何か失礼なことでも思わなかった？」

「え？何をですか？」

必殺☆愛想笑い（訳　それが何か？つか、分かってんだろ、んなこ

とはよぉ？）で、かわしながら黙々と箸を進める。
うま～！と心の中で感激していると、目の前にいる男は「まぁ、いいけどね。喜んでくれてるみたいだし」と呟きながら、割と早いペースでグラスの中にある酒を空にしていった。

意外と飲める奴みたいねー
ぜんっぜん顔色変わらないし！

酔ったら酔ったで、高峯　優夜の弱味を握れたみたいで楽しそうなのになぁ、と残念に思いながら同じペースで酒を仰ぐ。
私自身はほとんど酒に酔った試しがない。ザル、とまでは言わなくても頭の中は常にスッキリ爽やか状態で、二日酔いになったこともない。
佐原さんとよく飲みに行っていた時は、彼のほうが先に潰れてしまって一晩中看病をしていた記憶もある。
イタタタと二日酔いで唸る佐原さんのために薬を調達したり、二日酔いによく効くというしじみ汁を作ったり…
まぁ、あれは少々、いや…ちょび～っと塩辛くできちゃったけど。
うん、まぁ…うん。
あれはあれで良し。
うん、良いんだよ…ね？

「智美も結構酒飲めるんだね」

「はぁ、まぁ…。あの、高峯さん、その…智美って今は別に呼ばなくていいんじゃないですか」

「何で？付き合ってる彼女を名前で呼ぶのは当然だろう？だから智美も優夜って呼んでいいんだよ？」

んな悪魔の名前を呼んだら最後！！一気に骨の随から魂の奥底まで、全てを引き抜かれてカラッカラの干物になっちまうわ！！

ミイラと化した自分を想像して、ぞわっと怖気がさす。
冗談ではなく本気でミイラ化してしまう…と、グラスを握りしめる手に少し力を加えると、微かにグラスがメキッと音を立てたような気がしたが…気にしないでおくとしよう。

高峯　優夜は相変わらず、あの何考えてんのか分からな…否、９９％の女たちを虜にする魅惑の微笑みならぬ悪魔の微笑みを見せていた。
しかし、どこかしら感じる有無を言わせない何かがあって、警戒から思わず身を硬くする。
本能が発する警戒心は、驚くほどよく当たる…というのはすでによく分かっている。
だからこそ高峯　優夜に近付きたくはなかったのだが…まぁ、結果としては見ての通りだから何も言わないでおこう。

「…何か？」

「いや、名前。いつ呼んでくれるのかなって思ってね？」

キラキラとまばゆい光と共に放たれる笑顔。
だが私にとってはその笑顔が死刑宣告をする裁判官のようにすら見えてきて慌てて視線をそらした。

まだその話してたの！？
もう名前なんていいじゃん？
だいたいね、そこまで、こいつと馴れ合うつもりも協力するつもりもありませんからね！？

「呼んでくれないの？」

「呼べるわけないじゃないですか。私はいち平社員で、あなたは我が社でも有力な実績をもつ方なんですから」

「今はお互いプライベートだろう？なら、そんなこと気にしなくていいじゃないか」

いっちばん気にするわ！！！

「プライベートって…だからこそ、じゃないですか。私たちは本来こうやって食事をする仲じゃないですし」

「つれないな。これからそういう仲になっていこう、とは思わないの？」

思いません！
と、ハッキリ言いたいが一応は上司である彼にそこまで言うのは失礼にあたるかもしれない。
面倒だが、社会はやはり縦社会。しがないお茶くみＯＬにとって、その壁は非常に高い。

「どうでしょうね」

ゆっくりと魚の身を箸で解していきながら、首を傾げて外面スマイル。
高峯　優夜の神々しい（らしい）笑顔より威力は数百倍にも劣るが、この場を切り抜けられるならオッケー。…というか、私の限界がこのスマイルです。
はい、すみません…

「やっぱり手強いな…、智美は。他の女たちとは大違いだ」

「私はあまり他の方と変わらないと思いますが」

「全然違うじゃないか。ここまで興味を持たれないってのは新鮮だし」

新鮮って…
まさか私が他の女たちと違う（冷めた）態度を取ったから目をつけられてしまったんだろうか…
てか、何それ？は？
私みたいに自分に興味がない女は面白そ～だからちょっかいかけてみたと？
ちょい難レベルで今までと違うタイプを落としてみたら面白いんじゃね？的な？

「仏頂面になってるけど、どうかした？」

「いえ…別に。…ただ、そうやって興味本位で女を見ているのはどうかと」

「興味以外に何がある？俺には皆、同じにしか見えないからね。だ

けど智美は最初から他の女とは違ってたから、すごく興味が沸いてたよ」

「だから私に偽彼女のフリをしろと？」

「まぁね。面白そうだったし」

こいつの顔を殴ったら、暴行罪とかになるだろうか？
いや、それよか会社までクビになってしまうほうが問題だ…だけど、だけど！！

「今、私…高峯さんのその澄まし顔をぶん殴りたくなってしまいました」

「ははは、ハッキリ言うね。でも、さすがに殴られるのは嫌だな」

「嫌でしたら、そういう発言は慎んでください。不愉快ですし、失礼です」

もうこんな失礼男とは話す気すら失せる。

人のことを何だと思ってんだ。自分の興味を沸き立てる玩具か！そんなことのために私は、こんな奴の偽彼女をやり、さらには会社で馬鹿女たちから不当なイジメを受けてるのかと思うと…マジでやり切れねぇし！！！

「私、もう帰ります。偽彼女は私ではない他の方に頼んだらどうです？私には仮だとしても貴方の彼女を装うのは役不足ですから」

「残念だけど、智美以外に頼める女がいないんだよね。智美ほど俺を嫌ってる子はいないから」

微笑む彼の顔を睨みつけながら、私はハッと鼻を鳴らす。

「自分を嫌ってる女をわざわざ偽彼女にしようなんて…理解できないですね」

「俺を嫌いじゃないと、”偽　”なんてできないだろ？」

「そうでしょうけど。…分かりました、ハッキリ言います。私は貴方とこうやって話すのも嫌なくらい、貴方が嫌いです。ですから、とうてい彼女のフリなんてできないです。他を当たってください」

彼が私の会社の上司であることを気にしてはいたが、もういい。こんな奴にヘコヘコしたままでいるのは私の性には合わないし、例えこんな口を聞いたと会社中に知られてもこれはあくまでプライベート。
会社をクビになったり、という事態には陥らないだろう。
もともと円満な人間関係なんて期待してないし、この男の偽彼女になった時点ですでに私の地味でひっそりとした同僚との関係など壊れている。
失うほどあったわけではないが、それでも無くなったものがすでにあれば人間は強い。
奢られるのも嫌なので、テーブルにバシッと三千円を置いて（本当はもっと高そうな料理だけど、持ち合わせがこれくらいしかなったんだよね！へっ！後はこいつに払わせとけばいいや！）、失礼します、とも言わずに立ち去る。
背後を振り返ることもなく、ぺたんこ靴をペタペタと鳴らしながら去る私は多分それほどかっこよくはない。
戸惑い顔の店員さんには申し訳ないが、これ以上あの男と同じ席にいるのは堪えられない。

どうにでもなれ！！

自暴自棄とは分かりつつ、私は高峯　優夜を席に残したまま店を後にした。

「やっぱり面白いなぁ…智美は。全然変わってないみたいだし」

ククッと笑う声と、グラスの中にある氷が鳴る音が重なっていたことを私は知るよしもなかった。

8.

ムカつく
ムカつく
ムカつく
ムカつくぅうううう！！！

「ほんっとムカつくんですけどぉおお！！！」

ダンッとテーブルに置いた缶ビールから少量のビールが飛び出てテーブルを汚す。だが、そんなことなど気にしてられない。

「何なのあいつ！！女のこと馬鹿にしてんじゃねぇぞ、ごらぁ！！」

既に空けた五缶ほど缶ビールはテーブルの上に乱雑に置かれ、何缶かはテーブルの下に落ちてしまっている。テーブルに散乱しているのはチーズ、海苔、タコワサビ等など。数あるつまみを口にしつつ、口を開けば先程からは同じ愚痴。
…完全に見た目酔っ払いである。

「あんな馬鹿に付き合ってやる義理は元々ないんだっつの！！」

ピーナッツを口に放り込みながら、もぐもぐと咀嚼する。
普段ならば缶ビールは節約のために一缶、二缶くらいしか飲まないのだが今日ばかりは、止まらないぜ！とばからに次々と缶の中身を空けていく。

「偽彼女つったって、犬じゃん！犬って！！犬って何よ！？私はあいつの犬じゃねぇ！あいつの犬になるくらいなら、こっちが犬にしてやるわ！！（？）」

ムキーッ！と叫びながら、愚痴オンパレードを繰り広げる。
ちなみに酔ってはいない…と、思う。
ザルというほどではないが、酒は嗜む程度くらいには飲める口だと自負しているし、悲しいがもう若くないことも分かっているから無茶な飲み方をしないだけの分別がある。
だが明日は幸い土曜日。仮に飲みすぎたとしても仕事に支障を出すことはないから大丈夫だろう。

ほっと安心したら、少しだけ酔いが回ってくる。
ほろ酔い気分が丁度いいとは誰が言っていたんだろうか？
ぽかぽかと身体がほてるのを冷ますかのように、もう一缶空けようと缶を手に取った……が、不意に鳴る携帯の着信。
テーマは…”魔王”

「……」

無言で携帯を取りながら表示を見てみるとそれは”奴”から。

すぐに携帯をポイッとベッドに投げ捨てる。
早く切れろ～
早く切れろ～
念じつつ携帯を睨みつける。”魔王”はしばし鳴り響いていたが、
しばらくして着信が鳴り止む。
それに安心していると、再び”魔王”

「……うざっ」

それから切れては鳴り、の繰り返しをしながら鳴り続ける”魔王”
にほろ酔い気分も覚めて、怒りよりも、呪われるんじゃないかとい
う恐怖が沸き起こる。
だがしかし…出たら負けなのだ。こういうのは。

「負けてたまるかいっ！！」

携帯が再び鳴ったと同時に、台所にある鍋の中に封印！する。
戸棚の中にしまって、これで音はもう聞こえなくなった。

「ふはははは、不吉なメロディーを流しやがって！イケメンという魔
法も私には通じん！貴様になんぞ呪われたりしないぞ！」
（注：魔王設定にしたのは自分です）

本当なら仮にも上司の着信を無視するのは非常～にまずい気がするが、今は少しばかりの酔いと先程の自分の啖呵もある手前、携帯に出たくはなかった。

どうせクビになるなら、一矢報いるぐらいしてやる！

ふんっ、と封印された鍋が入っている戸棚を睨みつけてベッドの中に潜り込む。
仰向けだと少々寝づらいからと横向きになりながら布団にくるまる。

あー…
缶やつまみ…いいや、明日片付けしよー…っと。

それを最後に、意識はすっぽりと夢の中に入っていった。

◇◇◇◇

「…ん、よく寝たぁ…」

時刻は１１時。
窓から差し込む陽射しは高くなっていて、部屋の中が少しだけむし暑い。
部屋に設置されたクーラーはあるが、ＯＬの給料では頻繁にクーラ

ーなど使ってしまえばすぐに財布の中身が枯渇してしまう。いつも愛用している扇風機をかけて部屋の窓を開けると涼しい外の風が入ってきて気持ちいい。

「う～…ん、二日酔い…かも」

ズキズキと痛む頭を抑えながら昨日は飲みすぎたー…っと呻く。流しの蛇口を捻り、冷んやりとした水が流れ落ちていくのをぼんやりと眺め、コップ二杯分の水を一気に飲み干す。

もう少し寝てよっかなー…
どうせ予定なんてないし。

彼氏ナシの２８歳。
うん、悲しい。
うん、寝よう。

はーぁ…と、ベッドに戻ろうとしたところではたと気づく。

「……どうなったかな、アレ」

そろぉ～り、と目を向けるのはあの鍋が入った戸棚。
あの、という指示代名詞がつくようになってしまった鍋は今も戸棚

の奥に封印されてはいるが…なんせ携帯だ。
携帯は学生さんや若い人の友ともなってはいるが、２８歳独身（彼氏ナシ、友達少ない）にも重要なｔｏｏｌとなっている。
ｔｏｏｌってか、何でわざわざ”道具”を英語で言うかって？
そんなの英語で言いたい気分だからだよ！

まぁ、そんなことは置いておき。問題は……

「……見て、みる？」

なぜ疑問形なのか。
私は、一人暮らしだよ！？
でも、でもね…怖いんですよね！！禍々しいオーラが漂ってきそうで気持ち悪いっつの！！

塩を一つまみだけ持って、戸棚の奥に封印してあるソレを取り出す。

「悪の気よ～立ち去れ～ぃ！」

２８歳独身（彼氏ナシ、友達少ない、しかも地味）が鍋に向かって、うんたらかんたらな呪文を口にしながら塩をまく姿は何とも痛い…というかキモい。仕方ないことだと言い訳っぽいのはしてみるけど！とりあえず気の済むまで塩をまいてから、一呼吸おいて恐る恐る鍋の蓋を持ち上げる。

開けた瞬間に、黒紫系の邪気がもわんと沸き上がってきたのは気のせいだろうか？
いやいや、気のせいだと思いたいよ、ねぇ？

「う～…、頑張れ私ぃい…！」

鍋に手を突っ込もうとするが、なんか携帯を手にするのが非常に怖い。
怖すぎるのだ…なぜか。
シックスセンス？虫の知らせ？女の勘？
どれが告げているものかは分からないけれど、とにかく怖い。
本能が真っ赤な警告音を鳴らしている。

「このまま携帯解約とか無理かなぁ…」

言いつつ、この携帯が実はまだ買って一年もたっていないのだと気付き諦める。
少なくとも携帯は三年以上使うべし。貧乏ＯＬはそれくらい当たり前なのだ……多分だけど。

「ふ～…いくか」

爆弾が入っているわけでもないのに、この緊張感は何なのだろう。
気分はＦＢＩ捜査官。（最近外国のドラマに嵌まってるんだよね～）

何度か深呼吸をして、突撃だ！と思うと同時に手を鍋に突っ込む。
携帯を触った瞬間、ビリリと電気が走ったーー…なんてことはなく、
普通に手にすっぽり収まるＭＹ　携帯。

「まぁ、いきなり感電するとか呪いとか？現実にあるわけないもんね～」

アハハと笑って携帯を開き…

「ぎぃゃぁあああああ！！！」

条件反射で携帯を投げ捨てる。全力で。
携帯壊れたかも？なんて意識は全くないわけではなかったが、とにかくそんなことを考える余裕もなかった。

「な、なななな…！？」

どもる２８歳独身女。
しかし、しかし…だ、着信履歴７８回って何！？メール５６通！？
一通に一文字しか打ってないんかい！？

マジでありえん。
確実にありえん。

おぞましい怪物であるかのように携帯から距離をおく。

どうしよう！？
マジ怖いんですけど！！
え？え？
私、もしかして明日の朝日拝めなくなっちゃう！？
完全に死亡フラグ立ったかも！

やだやだやだやだ！
私は老衰で死ぬんだ！
私は老人ホームで静かにひっそりと眠るように死ぬんだい！

背筋からはい上がる悪寒に身を震わせていると、またも携帯の着信が鳴る。
ビクッと肩を揺らすが、それが”魔王”でないことに安心して携帯を手に取る。
奴の着信以外は全部同じにしてあるから、誰かまでは見ていない。
奴以外には着信番号を教えているのは家族と数少ない友達くらいなものだからと、安心して電話に出ることができる。
一息つきながらあんだけ力いっぱい投げたのに、意外と携帯は丈夫なんだな～と思い、携帯を耳にあてて「もしもし」と耳を澄ませる。

『あ、やっと出た。上司の電話を一日中無視するなんて君は…』

「いやぁあああああ！！！」

聞こえてきた声に大絶叫。
ブチッとすぐさま携帯を切って、再び鍋の中に封印した。

「うぅ…呪われた…」

半泣き状態で私はしばしベッドに倒れ伏した。
神様、仏様、悪魔様。
誰でもいいから哀れな私をお助け下さい……切実に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2004s/

守護犬とご主人様

2011年9月5日15時08分発行